『ユリシーズ』と「アイルランド問題」（1）※

—マシュー・アーノルドの影の下に—

Ulysses and the Irish Question—Under the Shadow of Matthew Arnold

伊藤　徳一郎
ITO Tokuichiro

ジェイムズ・ジョイス（James Joyce, 1882-1939）の『ユリシーズ』（*Ulysses,* 1922）は歴史的視点、なかんずく，強大な大英帝国の「先兵」,「お先棒」としてのアングロ・アイリッシュ (Anglo-Irish) と称されるイギリス系アイルランド人がアイルランドというに植民地に残した政治的，社会的，文化的，精神的簒奪の歴史を見据えて読まれるべき作品の一つである。この点，例えば，『ユリシーズ』は，そもそも冒頭の場面から，舞台といい，登場人物といい，彼らの言動といい，きわめて象徴的である，と言ってよいだろう。

本稿では，とくに『ユリシーズ』の冒頭に登場する人々の相関関係，互いに演ずるドラマを追い，その背後にあるイギリス（宗主国）とアイルランド（植民地）のしがらみ——いわゆる「アイルランド問題」（the Irish Question）の本質を浮き彫りにしてゆきたい。

I.　マーテロ塔の人々——アイルランドの茶番劇[1]

舞台はマーテロ塔。これは，ダブリン郊外の海岸にある円形の砲台で，岩肌に立つその姿は，アイルランドの伝統的象徴「ラウンド・タワー」（round tower）を思わせる。しかし実際のところは，皮肉にも，イギリスがその昔，ナポレオン軍の侵略に備えて建造した軍事要塞の名残であり，現在は「イギリス陸軍省 "the secretary of state for war"」(1.540)[2] の所有物=支配物となっている。

ここに現在，きわめて対照的な二人の共同借家人と一人の客人が住んでいる。共同借家人の一人は，あの『若き日の芸術家の肖像』（*A Portrait of the Artist as a Young Man*, 1914）ですでにお馴染みの人物。没落家族の長男で陰気な貧乏芸術家の卵，アイリッシュ・カトリックのスティーヴン・ディーダラス (Stephen Dedalus)。かたやもう一人は，やけに堂々とした陽気な金持ちの道楽息子，アングロ・アイリッシュ・カトリックの医学生マラカイ・マリガン（Malachi Mulligan）[3]。

そして客人はマリガンのイギリス人の友人で金持ちの御曹司ヘインズ (Haines) である。いかにもいわくありげな三人である。まずは共同借家人の二人から，いま少しその素性を明らかにしながら話をすすめよう。

といっても，スティーヴンについてはもはや説明はいらないだろう。そこでマラカイ・マリガンなる人物。この人物については，通称がバック・マリガンであることが，図らずも，その背信的素性・本質を見事にさらけだしている。「バック"Buck"」という言葉は，通常の英語では，「雄鹿」,「しゃれ者」などの意味であるが，アイルランド英語では，"buckeen"の派生語で「富裕階級の猿真似をする若者」の意味につかわれる[4]，という。この点でマリガンは，まさに名前通りの人物なのだ。彼は富裕なアングロ・アイリッシュの子弟の多くがそうであるように，プロテスタント系 (イギリス系) 名門大学トリニティ・カレッジ（Trinity College）に学び，イギリスのオックスフォード大学留学

※　本稿は，平成16－17年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）［ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』と「アイルランド問題」］（課題番号:16520141）に基づく研究成果の一部である。

を自慢する医学生である。同じく大学出といっても，貧弱なカトリック系 (アイルランド系) 大学ユニバーシティ・カレッジ（University College) の出身者スティーヴンが，しがない臨時教員に甘んじるその日暮らしの貧乏人であるのとは大違いである。まさにマリガンはアイルランドの知的エリートの典型的出世コースを歩いているのである。しかし，このことは，スティーヴンのような土着のアイルランド人=植民地人にとっては，とりもなおさず，イギリス人=宗主国の「猿真似」をしてその恩恵にあずかろうとする卑しい背信的輩に他ならない。そして，この「猿真似」は，カトリック教徒としても，信仰を曲げてでも世俗的成功をはかろうとする二重の背信行為なのだ。

こうした二人は，所詮，水と油である。スティーヴンにとって，マリガンが，イギリスという御主人に媚びへつらう「宮廷道化師 "A jester"」(2.44),「陽気な裏切り者 "gay betrayer"」(1.405) なら，マリガンにおいて，スティーヴンは，大英帝国に仕えるアイルランドの奴隷「キャリバン "Caliban"」(1.143),「あわれな犬ころ"poor dogsbody"」(1.112),「すかんぴんのイエズス会士 "The jejune jesuit"」(1.45) にすぎない。互いに「道化」,「奴隷」と蔑みあう二人には，もはや「忘れ去られた友情 "forgotten friendship"」(1.308) しかない。あるのは，二人の互いの心の奥底にしみ込んでいる優越感，劣等感，敵対心，猜疑心だけなのである。

次に，三人目の人物，ヘインズ。先に触れたように，この人物は，マリガンのイギリスからきた客人である。オックスフォード大学でマリガンと知り合い，アイルランドの民俗研究ということでダブリンにきている。このダブリン来訪は，一見，アイルランド親派の民俗研究家としてのフィールド・ワークのようにみえる。しかしそれは，決して本来的な学問的興味に根ざすものではない。ヘインズがアイルランドに寄せる興味は，もっぱら「原始的なアイルランド人 "wild Irish"」(1.731) である。イギリスからきたヘインズにおいて，アイルランドは，あくまでも「原始的 "wild"」な植民地人の珍奇な風俗，風習，言語の絶好の標本収集の場にすぎない。つまり，ヘインズのアイルランド民俗研究は，本質的には，イギリス人がその植民地において己れの人種的優越性を確認，誇示する欺瞞的行為のあらわれにすぎないのである。そしてそのフィールド・ワークも所詮は，好事家の域を出ない皮相的なものでしかないのだ。

この点，マリガンも彼の友人というよりは，実は，スティーヴンの言う「豹の旦那と猟犬 "the panthersahib and his pointer」(3.277-8)，すなわち，ヘインズという「旦那さま」のお供をする植民地の "collaborator", "informant"の役をつとめている人間，という方がより真実に近いのだ[5]。この「旦那さま」は，夜中に発砲騒ぎをおこし，スティーヴンの命を奪いかける。スティーブンにとっては，何とも迷惑な招かれざる「サクソン野郎 "The Sassenach"」(1.232),「アイルランドに押し入った他国者 "the stranger in her house"」(9.37) でもある。

さて，最後になってしまったが，マーテロ塔には，以上三人の他にもう一人忘れてはならない人物が登場する。朝のミルクを届けにくる貧しいミルク売りの老婆である。

スティーヴンの目には，その老いたる姿が，いかにも，お馴染みのアイルランドの伝統的象徴「貧しき老婆 "poor old woman"」と重なり，さらには，まるで「征服者と陽気な裏切り者に仕える卑しい姿に身をやつした不死の女神 "lowly form of an immortal serving her conqueror and her gay betrayer"」,「その両方になぶられる寝取られ女 "their common cuckquean"」のように映る (1.403-5)。この老婆は，以下のごとく，

—Are you a medical student, sir? the old woman asked.

—I am, ma'am, Buck Mulligan answered.

—Look at that now, she said.

Stephen listened in scornful silence. She bows her old head to a voice that speaks to her loudly, her bonesetter, her medicineman: me she slights. To the voice that will shrive and oil for the grave all there is of her but her woman's unclean loins, of

man's flesh made not in God's likeness, the serpent's prey. And to the loud voice that now bids her be silent with wondering unsteady eyes. (1.415-23)

(—こちらは医学生さんで?と老婆がたずねた。

—そうだよ，おかみさん，とバック・マリガンが答えた。

—まあ，道理でねえ，と老婆が言った。

スティーヴンは軽蔑しながら黙って聞いていた。彼女は大声で語る声に老いた頭をさげる。骨つぎ師に，祈濤治療師に。ぼくなどを軽く見ている。告解を聞き，彼女のすべてに，女のけがれた腰，神の姿をかたどらずに男の肉で造られたもの，蛇の餌食となるあそこは別として，ほかのすべてに終油を塗り，墓へ送る声に。いまは黙れと命じる大きな声に頭をさげている。とまどったようなおどおどした目つきで。)

マリガン，ヘインズら「大声で語る声 "a voice that speaks to her loudly"」には妙にご機嫌を取る。しかしその一方において，いわば，アイルランドの忠実，孤独な「コーディリア"Cordelia"」(9.314) にして「牡牛を助ける歌びと"the bullockbefriending bard」(2.431) のスティーヴンを無視するのだ。

さて，そんな老婆に，アイルランド民俗研究家を自ら任ずるヘインズは，さっそく，得意げに，からかい半分に，ゲール語で話しかける。しかし，母国語であるゲール語を知らない (奪われた) 彼女は皮肉にもそれをフランス語と聞き間違えてしまう。

—Do you understand what he says? Stephen asked her.

—Is it French you are talking, sir? the old woman said to Haines.

Haines spoke to her again a longer speech, confidently.

—Irish, Buck Mulligan said. Is there Gaelic on you?

—I thought it was Irish, she said, by the sound of it. Are you from the west, sir?

—I am an Englishman, Haines answered.

—He's English, Buck Mulligan said, and he thinks we ought to speak Irish in Ireland.

—Sure we ought to, the old woman said, and I'm ashamed I don't speak the language myself. I'm told it's a grand language by them that knows. (1.424-34)

(—この人の言うのがわかるかい?とスティーヴンは老婆にたずねた。

—フランス語を話していらっしゃるんで?と老婆がヘインズにたずねた。ヘインズは自信たっぷりに，もう一度，もっと長くしゃべった。

—アイルランド語だよ，とバック・マリガンが言った。ゲール語は知ってるかい?

—響きからしてアイルランド語だと思いましたよ，と彼女が言った。こちらは西からおいでですの?

—ぼくはイギリス人だ，とヘインズが答えた。

—この人はイギリス人だがね，とバック・マリガンが言った。アイルランドではアイルランド語を話すのが本当だって思っている。

—そうですとも，と老婆が言った。自分で話せないのが恥ずかしいですよ。知っている人に聞くと，立派な言葉だそうですけど)

かくして，母国語のゲール語をフランス語と聞き間違え，イギリス人をアイルランド人と見違える老婆の無知は，スティーヴンにとって，何とも悲しいアイルランドの茶番劇 (と同時にそれを承知でからかい，アイルランドではアイルランド語を話すべきと抜けぬけと説教するヘインズの傲慢さも彼には許しがたいイギリスの茶番劇でしかないのだが…) と化す。無知な老いたるミルク売りの女は，スティーヴンにおいては，いわば，己れの「征服者」ヘインズ＝イギリス人と「陽気な裏切り者」バック・マリガン＝アングロ・アイリッシュに仕える娼婦と化すのである。

以上，我々は，『ユリシーズ』の第１挿話，マーテロ塔に集う人々と彼らが織り成すアイルランドの茶番劇について眺めてきた。それは，巨視的な意味において，ある批評家の指摘するがごとく，「19世紀イギリス支配下のアイルランド社会に起きたことの，悲観的ではあるが，見事な要約」[6]である，と言っても過言ではないだろう。

Ⅱ．スティーヴンの空想――黒幕の影――マシュウー・アーノルドとの対決

先の章で我々は，マーテロ塔に集まった人々――スティーヴン，マリガン，ヘインズ，ミルク売りの老婆――のまさにアイルランドの茶番とも言うべき人間ドラマを見てきた。しかし，この茶番劇の裏側には，実はもう一人の，言わば第五の黒幕的人物が存在し，表舞台に暗い影を落とす。

この黒幕的人物は，二度，マーテロ塔の人々の中にその存在を示す。最初はマリガンの口を通し，二度目はスティーヴンの空想を通してである。このうち，はっきりと姿をあらわすのは，二度目のことである。具体的にその場面を見てみよう。

スティーヴンとマリガンがアイルランドの芸術を話題にする。そのやりとりがつい脇道に逸れ，話がヘインズ，そしてオックスフォード大学の学生リンチへと向かってしまう。以下は，マリガンが口にしたその学生リンチの話から，スティーヴンが思い浮かべた空想である。

> Young shouts of moneyed voices in Clive Kempthorpe's rooms.Palefaces: they hold their ribs with laughter, one clasping another. O, I shall expire! Break the news to her gently, Aubrey! I shall die! With slit ribbons of his shirt whipping the air he hops and hobbles round the table, with trousers down at heels, chased by Ades of Magdalen with the tailor's shears. A scared calf's face gilded with marmalade. I don't want to be debagged! Don't you play the giddy ox with me!
>
> Shouts from the open window startling evening in the quadrangle. **A deaf gardener, aproned, masked with Matthew Arnold's face**, pushes his mower on the sombre lawn watching narrowly the dancing motes of grasshalms.
>
> To ourselves .... new paganism .... *omphalos*（1.165-76；emphasis added）
>
> （クライヴ・ケンソープの部屋から聞える金持どもの若々しい叫び声。なまっ白い顔の種族。やつらは腹をかかえて笑う。互いにしがみついて。ああ，死にそうだ！オーブリー，母にはやさしく告げてくれ！死んじまうよう！リボンのように切り裂かれたシャツの裾をはためかせて，テーブルのまわりをころげまわる。踵までズボンをずりさげて，裁ち鋏を手にしたモードリン学寮のアディスに追われて。マーマレードを金ぴかに塗りたくられた怯える子牛の顔。ズボンをぬがされるのはいやだってば!ばかなまねはよせよう！あけ放った窓から聞える喚声が中庭の夕暮れを驚かす。**前掛けをした耳の遠い庭師がマシュー・アーノルドのような顔をして**，薄暗がりの芝生に芝刈機をかけている。踊り跳ねるこまかな草の茎を目を細めてみつめながら。
>
> われら自身に.....新しい異教主義.....《オムファロス》。）[強調は筆者]

この空想は，オックスフォード大学のモードリン学寮（Magdalen College）の一室が舞台となっている。まずその最初の方は，"debagging" と呼ばれ，イギリスの大学ではよく知られた学生のリンチの風習――いやなやつのズボンを皆でぬがせてからかう――場面である。昔からとくにオックスフォード大学の隠れたる風習としてよく知られおり，おそらくそのあたりの連想が働いたものであろう。それから空想は，学寮の一室から，一転，「中庭 "the quadrangle"」へと切り替わり，そこに耳の遠い「**マシュー・アーノルドのような顔をした"masked with Matthew Arnold"**」庭師が登場し，学生たちの乱痴気騒ぎをよそに黙々と芝刈りにいそしむ，というのである。実は，上に述べた，第五の影の人物とは，ここに庭師の顔として言及されたマシュー・アーノルド（Matthew Arnold,1822-88），その人に他ならない。

アーノルドと言えば，イギリスのヴィクトリア朝時代（1837-1901）の代表的詩人，批評家，教育

家としてその名を知られる。詩人・批評家として健筆を振るうかたわら，オックスフォード大学の「詩学教授」(Professor of Poetry) を十年間 (1857-67) 務め，さらには初等・中等教育の「視学官」(Inspector of Schools) を死去（1888）する間際まで生涯にわたり務め上げた。言わば大英帝国の文壇の大御所，批評界の権威者であり，教育界の重鎮であった人物である。このアーノルドが生涯にわたって絶大の信頼と変わらぬ尊敬・愛情を寄せたのが，彼の母校，他ならぬオックスフォード大学であった。

> ...it is much more out of genuine devotion to the University of Oxford, for which I feel, and always must feel, the fondest, the most reverential attachment. In an epoch of dissolution and transformation, such as that on which we are now entered, habits, ties, and associations are inevitably broken up, the action of individuals becomes more distinct, the shortcomings, errors, heats, disputes, which necessarily attend individual action, are brought into greater prominence.(7)

これは，アーノルドの『批評論集』(*Essays in Criticism*, Second Series, 1888) の序文に見られる言葉である。アーノルドにとって，同時代のヴィクトリア朝社会は，人と人の絆が断ち切れ，悪しき「個人行動 "the action of individuals"」が突出してきた「分裂と変動の時代 "an epoch of dissolution and transformation"」にあった。そうした危機的社会状況にあって，この序文の言葉は，母校オックスフォード大学が良識の府，学問の府としていかにアーノルドの生涯の揺るぎなき，言わば心の拠り所であったかを雄弁に物語っていよう。

同じ序文には，さらに次のようなオックスフォード大学賛美の言葉がつづく。

> ...Beautiful city! so venerable, so lovely, so nravaged by the fierce intellectual life of our century, so serene!
>
> "**There are our young barbarians, all at plays!**"
>
> And yet, steeped in sentiment as she lies, **spreading her gardens to the moonlight**, and whispering from her towers the last enchantments of the Middle Age, who will deny that Oxford, by her ineffable charm, keeps over calling us mearer to the true goal of all us, to the ideal , to perfection,——to beauty, in a word...？(8)

強調をほどこした二つの文・語句に注意して全体をながめていただきたい。大体の意味は次のようなものである。

我らの美しき町・オックスフォード。それは現代の激しい知的生活に損なわれることなく，うるわしく，静かにたたずんでいる。ただ今は「遊んでばかりいる無教養な若い学生たちがいっぱいいる。"**There are young barbarians, all at plays!**"」。しかし，この軽薄な学生たちにより，オックスフォード大学の権威がゆらぐことはいささかともない。われらがオックスフォードの町＝大学は，中世の昔から悠然と変ることなくさん然として「月光に美しき庭をひろげている "**spreading her gardens to the moonlight**"」，そして高き塔からは中世の輝かしき最後の呪文をささやき，我々を魅了し，我々すべての真のゴールである理想，完全，すなわち美へと誘いつづけるからである。文脈に即して，アーノルドの言わんとするところを斟酌すれば，大体こんなところであろう。

そこでこのオックスフォードの町＝大学賛辞を先のスティーヴンの空想とすり合わせて見よう。

まず最初のアーノルドの歎く，オックスフォード大学の「遊んでばかりいる無教養な若い学生たち」。これは，そのまま，スティーヴンの空想に浮ぶあの学生たち——オックスフォード大学・モードリン学寮でリンチ・乱痴気騒ぎに興ずる学生たち——に重り合う。そして次にアーノルドの賛美する「月光に美しき庭を広げている」オックスフォード大学の静謐な風景。この風景もまた，微妙ではあるものの，スティーヴンの空想に浮ぶオックスフォード大学のあの夕暮れ時の静かな「中庭」——皮肉にもその静謐さは，学生たちの乱痴気騒ぎに破られるが——と響き合うだろう。

こうした語句＝イメージの響き合いは一体何を意味するのか。ジョイスがアーノルドの『批評論集』の序文を読んで＝意識してスティーヴンの空想を仕立てあげたということなのか。あるいは単なる偶然にすぎないのか。この点については，筆者は次のように考えてみたい。

アーノルドは，色々な意味において，ジョイスには特別の存在であった。まず一般論として言えば，先にも触れたように，ジョイスの同時代――ヴィクトリア朝時代――において，アーノルドはイギリス文壇の大御所であった。その発言や思想はジョイスをふくめ，当時の文学関係者たちの注目を集めた。第二に，そうした状況下，アーノルドは，いみじくも，当時のイギリス国内最大の政治課題，すなわち「アイルランド自治問題」（The Irish Home Rule）について，「連合派」（Unionist）の論客として，アイルランドのイギリスからの分離・独立反対を強くアピールしていた[9]。この点は，イギリスの植民地作家として出発し，言わばイギリスとの対決のなかで，その文学を築き上げたジョイスにとって，アーノルドとの距離・関係を決定づけるものであった。第三に，奇しくも，アーノルドの実弟（Thomas Arnold, 1823-1900）はジョイスの大学時代の恩師の一人で，ジョイスはこの実弟から親しく指導を受けた経験を持つ[10]。そのつながりから，アーノルドには個人的に特別な感情をいだいたと思われる。

ジョイスにとって，アーノルドがいかに特別な存在であったことは，大体これでおわかりいただけたであろう。案の定，それを反映したものか，ジョイスは実際にアーノルドの著作にはよく目を通しているのである。例えば，我々がこれから問題とするアーノルドの代表的著作『教養と無秩序』（*Culture and Anarchy,* 1869）などは，ジョイスの愛読者の一冊であったようである。ちなみに，ジョイスの『ユリシーズ』の人物設定やプロット構成，テーマは，『教養と無秩序』における「ヘブライ主義とギリシャ主義」("Hebraism and Hellenism")の考察から重要なヒントを得たと言われている[11]。

ジョイスの作品は，ロラン・バルト（Roland Barthes, 1915-80）などを引き合いにして，よく「引用の織物」[12]と称される。ジョイスの代表作である『ユリシーズ』は，とくにこの「引用の織物」という特徴が顕著である。実際に『ユリシーズ』という作品を覗いてみると，そのすべてに無数の（先行する作品からの）引用がテクストとして織り込まれていることがわかる。では，その無数の引用の中に，果たして，我々がジョイスとの特別なつながりを問題としたアーノルドのものは含まれているのだろうか。然りである。ギフォード（Don Gifford）らが明らかにしているように[13]，やはり，その著作からいくつかの語句が引用（言及）として織り込まれているのだ。ただどうしたことか，我々が先ほどからとりあげているスティーヴンの空想について言えば，これまでのところ，アーノルドの『批評論集』の序文との引用関連は問題となっていない。

しかし，すくなくとも筆者には，リンチ・乱痴気騒ぎに興ずる学生たちといい，夕暮れの静寂につつまれる庭といい，あるいは両者の対比的な組み合わせといい，スティーヴンのオックスフォード大学の空想内容は，アーノルドの『批評論集』の序文にあるオックスフォード大学の賞賛・賛美の言葉を充分に意識したものとしか考えられない。ただ引用したとおぼしき語句＝イメージが，その場の文脈において微妙に変化＝屈折している分，直接にはわかりにくいだけのことである。その覆いをとれば，アーノルドを下敷きにした，まさに引用の「織物」がスティーヴンの空想となっていると言っても過言ではない。かのクリスティヴァ（Julia Kristeva, 1941〜）は，かつて「あらゆるテクストは引用のモザイクとして構築されている。テクストはすべて，もう一つの別なテクストを吸収，変形したものである。」[14]と語った。奇しくも，このクリスティヴァの語るいわゆる「間テクスト性」の妙こそ，見事なまでに，スティーヴンの空想の文学的ありよう――アーノルドの引用・変形――を言い当てたものなのである。

実は，そのよう考えてみるとはじめて，スティーヴンの空想におけるあの最後の謎――オックスフォード大学の中庭に耳の遠い，アーノルドのような顔をした奇妙な庭師が唐突に登場する――についても，

その意味がはっきりしてくる。これは，明らかに，ジョイス一流の暗示，言わば「なぞかけ」（riddle）の種明かしに他ならないのである。言い換えるならば，ジョイスがスティーヴンの空想全体について，読者に向かい，巧妙に最後にその種を明かし，同時にその種もとであるアーノルドを皮肉っている。最後に至って，スティーヴンの空想全体がアーノルドのテクスト――『批評論集』の序文における，あのオックスフォード大学賛美のパロデイであり，アーノルドその人の戯画化＝嘲笑であることを，ジョイス自らが，言わばメタ的に読者にあらわにしているのに他ならないのである。

以上，我々はスティーヴンのアーノルドにいたる奇妙な空想について考察を加えてきた。ここまでの結果として，この空想は，ジョイスがアーノルドのテクストを自己のそれに巧みに織り込みつつ，アーノルド，そして彼のオックスフォード大学賛美をからかい批判したものであることがわかった。しかし，ではアーノルドのような顔をした庭師＝庭師に擬せられたアーノルドがなぜ耳が遠い人間として登場し，学寮の学生たちの乱痴気騒ぎをよそに――無視するかのように――黙々と芝刈りにいそしむのか，この点については，アーノルドの人となりや思想を明らかにした上で，改めて考えてみたいのでとりあえずは次に話を移そう。

Ⅲ．オックスフォード大学――大英帝国――宗主国のくびき

アーノルドという人物が，影のキーマンとしてマーテロ塔に集まった人々にとって何故に大きな意味を持つ存在なのか。この問題を解くには，スティーヴンの空想に先立って，以下のごとく，二つの場面を見ておかなければならないだろう。

（1）—**The rage of Caliban at not seeing his face in a mirror**, he [Mulligan] said. If Wilde were only alive to see you!

Drawing back and pointing, Stephen said with bitterness:

—It is a symbol of Irish art. **The cracked lookingglass of a servant**.

Buck Mulligan suddenly linked his arm in Stephen's and walked with him round the tower, his razor and mirror clacking in the pocket where he had thrust them. (1.143-9)（—**鏡におのが顔が見えないキャリバンの怒り**，と彼［マリガン］は言った。ワイルドが生きてておまえを見たらなあ!

スティーヴンは身を引いて指さしながら辛辣な口調で言った。

—これがアイルランド芸術の象徴だよ。**召使のひび割れ鏡が**。バック・マリガンは不意にスティーヴンと腕を組んでいっしょに塔をぐるりとまわった。ポケットに突っこんだ剃刀と鏡がかちゃかちゃと鳴った。）

この場面は，マリガンが，得意のジョークを飛ばし，洒落っ気たっぷりに，スティーヴンを「**鏡におのが顔が見えないキャリバンの怒り"The rage of Caliban at not seeing his face in a mirror"**」とからかうところである。これは，オスカー・ワイルド（Oscar Wilde, 1854-1900）を借りたもじりである。借用先は，『ドリアン・グレイの肖像』（*The Picture of Dorian Gray*, 1981）の序文の一節。

The nineteenth century dislike of Realism is the rage of Caliban seeing his own face in a glass. The nineteenth century dislike of Romanticism is **the rage of Caliban not seeing his own face in a glass.**[15]

（19世紀のリアリズムに対する嫌悪は鏡におのが顔を見るキャリバンの怒りである。19世紀のロマンティシズムに対する嫌悪は**鏡におのが顔が見えないキャリバンの怒り**である。）

引用したワイルドの序文の一節全体は，19世紀文学におけるリアリズムとロマンティシズム双方を巧みに揶揄したものである。リアリズムの写実的な鏡には，半人半獣のキャリバン（Caliban）の醜い顔はそのまま醜く映る。その醜い顔を見ておぞましさにキャリバンは怒る。このキャリバンの怒り

は，リアリズムの過度の現実主義，露悪趣味への皮肉。他方，ロマンティシズムの非写実的な（理想化された）鏡には，キャリバンの醜い顔はそのままではなく，美化されて映しだされる。その美化された顔を見て，キャリバンそれを自分の顔ではないと怒る。このキャリバンの怒りは，ロマンティシズムの過度の理想主義，現実乖離・逃避への皮肉。ワイルドは19世紀リアリズムを切り，返す刀で19世紀ロマンティシズムを切るのである。

ワイルドがここで言う「鏡」は，古来，「芸術」の比喩，あるいは象徴とされてきた。そして，「鏡」は「自然」をありのままに写しだす道具であり，「芸術」は本来的にこの「鏡」の役目を果たさなければならない。すなわち，芸術＝自然の鏡（模倣）という考えがアリストテレス以来の西洋芸術の一大原理であった。しかし，周知のように，ワイルドはこの伝統原理に反旗を翻す。「芸術が人生を模倣するよりもはるかに人生が芸術を模倣する。」("Life imitates art far more than Art imitates life.")[16]として，「芸術」と「自然」の主従関係を逆転させ，「芸術」の自立性を唱えた。「芸術」のための「芸術」，「芸術」それ自体を唯一の目的とする「唯美主義」（aestheticism）の「美」の「鏡」，これがワイルドのめざすところであったのである。

19世紀末，物質主義，科学主義を背にリアリズム文学が浸透する中で，いわゆる「芸術至上主義」（art for art's sake）を唱え，文学をひたすらに「芸術」とみなし，「美の司祭」を自任したワルド。『ドリアン・グレイの肖像』の序文の一節は，まさにこのワイルドならではの逆説の名台詞というほかはない。あざやかな機知であるが，ワイルドの巧妙さについては，さらに彼がこの芸当をキャリバンをダシにしてシェイクスピアというイギリス文学の最大権威をからかい，言わば，コケにして自らを権威づけ，自説に箔をつけていることも充分に注意しておくべきだろう。ワイルドがダシにしたキャリバンとは無論，シェイクスピアの遺作『テンペスト』(*The Tempest*, 1611) の半獣半人の怪獣。また彼の使った「鏡」＝「芸術」の比喩も，シェイクスピアの『ハムレット』，三幕二場のあのあまりにも有名な台詞 "...playing, whose end, both at the first and now, was and is, to hold, as ‘twere, the mirror up to nature." (「芝居というものは，その始めも今日も，昔も今も，いわば自然を鏡に映して見せるためのもの」) (III.ii.l.20-3)[17] を織り込み，それを茶化したものなのだ。

そこで話しをまた場面（１）に戻し，マリガンの皮肉を見てみる。するとマリガンは，ワイルドの台詞＝逆説を下敷きにしてスティーヴンを巧みにからかっていることがわかろう。すなわち，マリガンはスティーヴン中に「**鏡におのが顔が見えないキャリバンの怒り**」――19世紀のロマンティシズム嫌悪――の痕跡を見出す。そして，同時にその裏側にあるスティーヴンの過度のリアリズム精神――マリガンの言う「やりきれない詩人"dreadful bard"」(1.134)，「やりきれない男 "an impossible person"」(1.222) の冷ややかな精神――を痛烈に批判するのだ。洒落，ジョーク，皮肉の名人，マリガンの面目躍如である。

だが対するスティーヴンも負けてはいない。からかうマリガンにアイルランドの芸術を「**召し使いのひび割れ鏡 "cracked lookingglass of a servant**"」と言って反撃する。すなわち，マリガンのキャリバン――ミラノ大公（the right Duke of Milan）の召使――と鏡の比喩を巧妙にも逆手にとり，アイルランド芸術の正体をイギリスという主人に服従する召し使いのひび割れた鏡＝芸術的自由のない，真実を映さない偽りの芸術と喝破するのだ。さらに言えば，この「**召し使いのひび割れ鏡**」とは，暗に，マリガンのアングロ・アイリッシュ仲間の文人――エィ・イー（AEこと，George Russell, 1867-1935）やイェイツ（W.B. Yeats, 1865-1939）――らが旗振りとなった，アイルランド文芸復興運動を揶揄したものであろう。この文芸運動は，アイルランドのための文芸運動というより，本来的にはケルトのロマン（神話や伝承）を都合よく復活＝利用した，アングロ・アイリッシュの自己防衛，自己正当化という政治的性格を多く有していた。[18] スティーヴンは，そうしたケルト主義＝ロマン主義の政治性，欺瞞性を皮肉っているのである。

スティーヴンの使った，こうした反撃の比喩＝手もそのネタは実はワイルドである。

Cyril…I can quite understand your objection to art being treated as mirror. You [Vivian] think it would reduce genius to the positon of **a cracked looking-glass**.[19]

（君が芸術を鏡とする考えに反対なのは，僕にはよくわかるさ。君は，そうすると天才が**ひび割れた鏡**になり下ってしまうと考えるんだね。）

これは，『虚言の衰退』（*The Decay of Lying*, 1891）におけるシリルとヴィヴィアンの芸術論争の一節。天才的芸術家を自任するヴィヴィアン（ワイルドの分身）の唯美主義を鮮明にし，美的創造の天才としての芸術家を賞賛したものである。この一節を承知の上で，スティーヴンは，言わば，ワイルドという，相手の使った手の上を行き，相手をやり込めている，ということになる。スティーヴンは，得意げに洒落・機知を飛ばして自分を攻撃するマリガンに対し，そのレベルの低さをからかい，二重に反撃を加え，ぎゃふんと言わせた，というところだろうか。

以上，場面（1）において，まず我々の目を惹くのは，何と言っても，スティーヴンとマリガンの丁々発止の舌戦であろう。しかし，我々がここで押さえておきたいことは，その舌戦の面白さもさることながら，その舌戦の裏舞台にワイルドがぴたりとはりついていることである。

我々がワイルドに注目すべき点は，彼の文才というより，彼の出自，経歴である。彼はアイルランドのイギリス人，すなわち，アングロ・アイリッシュの典型的な知的エリートであり，アイルランドのイギリス系（プロテスタント系）名門大学＝トリニティ・カレッジからイギリス随一の名門大学＝オックスフォードに学んだ人間であった。ワイルドが，オックスフォード在学中から，持ち前の機知と話術を駆使，華やかなパフォーマンスによりイギリス文壇の注目を集め，一躍その寵児となったことはあまりにも有名である。しかし，その後の破天荒な言動により結局，彼は自滅の道をたどった。

しかし，これは，言わばうわべの仮面であり，ワイルドはやはり，本質的にはイギリスの知的牙城にして権威の象徴たるオックスフォード大学出のエリート文人であり，最後まで野暮なアイルランド人としてよりも，イギリス紳士として生きることを選んだ人間であった。マリガンの言う，まさにヘインズと同じ「オックスフォード野郎 "the oxy chap"」（1.154）であるのだ。

マリガン，スティーヴン双方が問題とするのは，まさにワイルドのこうした，イギリス的本質なのだ。前者は，それを依拠すべき権威として，後者はそれを対決すべき対象としてとらえている点が大きく異なるだけである。では続けて次の場面に移ろう。

（2）—**Cracked lookingglass of a servant** ! Tell that to the oxy chap downstairs and touch him for a guinea. He's stinking with money and thinks you're not a gentleman. His old fellow made his tin by selling jalap to Zulus or some bloody swindle or other. God, Kinch, **if you and I could only work together we might do something for the island. Hellenise it**. (1.154-8)

（—**召使のひび割れ鏡ねえ**。下のオックス野郎に話してみな。それで一ギニーせしめよ。やつには腐るほど金があるし，おまえなんぞ紳士じゃないと思ってる。やつの親父はズールー族にヤラッパを売るやら，ひでえいかさまを仕掛けるやら何やらで，現なまをつかんだんだぜ。まったく，キンチよ，**おれとおまえが組みさえすりゃ，この島のために一働きできようってもんだ。ギリシアふうに変えるとかさ**。）

この場面では，特にマリガンのアングロ・アイリッシュとしての姿——イギリス人＝植民者の現地仲介者・案内人・情報提供者——が浮き彫りとなる。

アイルランド芸術＝「**召し使いのひび割れ鏡**」。マリガンは，スティーヴンが発したこの表現をことのほか気に入る。そこで，スティーヴンと図り，これをヘインズ——イギリスから来た，「オックスフォード野郎」で，自称，アイルランド民俗研究家——にアイルランド人の口達者＝民俗的特性の標本として差し出し，金をせしめようと思いつく。むろん，冗談であり，スティーヴンもヘインズも

真に受けるはずもない。マリガンの言動は，一見，他愛のないものに終わる。しかし，それはいみじくも，マリガンを中心にした，スティーヴン，ヘインズ，三者の関係を雄弁に物語っているのだ。

マリガンとヘインズはオックスフォード大学を通じた友人関係にある。しかし，それは対等な人間関係ではなく，あくまでマリガンが金持ちのヘインズにへつらい，その金をせしめようとする卑屈な関係でしかない。マリガンの言動からは，このことがまず明らかになる。そして，次は，マリガンとスティーヴンの関係である。アイルランドの口達者な芸術家スティーヴンは，マリガンにとっては，ヘインズに差し出す大切な金づる，すなわち，アイルランドに来たケルト民俗研究家ヘインズの好事的欲望をみたす格好の人種的標本となるのだ。

マリガン，スティーブン，ヘインズの関係図は，大体このようなものであるが，実はそれにはさらにもうひとつ大きな関係が重ねあわされている。他でもない，イギリス対アイルランド，宗主国と植民地，植民者と植民地人という，あの関係図である。マリガンは，何度も触れるようにアングロ・アイリッシュである。彼は，半ばアイルランド人であり，半ばイギリス人である。言わば，アイルランドとイギリスの中間にある人間であるが，アイルランド＝植民地にあって，イギリス＝宗主国寄りの姿勢をとるのである。先に見たオスカー・ワイルドと同じである。

マリガンは，オックスフォード大学＝宗主国の名門大学と関係をもち，オックスフォード出のヘインズと交友関係を結ぶ。そしてヘインズをアイルランドに招く。ヘインズは，宗主国の来訪者として，高圧的，傲慢に振舞う。マリガンはそんなヘインズのご機嫌をとる。植民地人のスティーヴンは，二人のなぶり者にされる。場面（２）からは，こんな相関関係が浮びあがって来る。しかし忘れてならないのは，場面（２）にも，もう一人，あの影の人物，アーノルドの存在がちらつくのだ。

場面（１）をふりかえると，スティーヴンとの舌戦のさ中，マリガンは，不意に和解を申し入れるかのようにスティーヴンと腕を組み，マーテロ塔の中をまわっていた。場面（２）で，マリガンは，この和解の姿勢を言葉にあらわし，スティーヴンに（先に見た如き）次のような提案を持ちかける。

> ...God, Kinch, if you and I could only work together we might do something for the island. **Hellenise it**. (1.157-8)
>
> (まったく，キンチよ，おれとおまえが組みさえすりゃ，この島のために一働きできょうってもんだ。**ギリシャふうに変えるとかさ**。)

"Hellenise"という言葉に注目していただきたい。文脈からして，他動詞で「ギリシャふうに変える」，「ギリシャ化する」などの意味であろうか。少し余談になるが，かの『オックスフォード辞典』（*Oxford English Dictionary*）によれば，この言葉は，自動詞として「ギリシャ語を使う"to use the Greek language"」，「ギリシャ的，ヘレニスティクな習慣を身につける"to adopt Greek or Hellenistic habits"」，「ギリシャ人，ヘレニストになる，ないしそのように生きる"to become, or live as, a Greek or Hellenist"」などの意味に使われるのが一般で，「ヘレニズムを採用する"to adopt Hellenism"」という意味で使われたのは唯一アーノルドの場合だけであるという。[20]

ちなみに，『オックスフォード辞典』が"nonce-use"，いわゆる「その場限りの使用語」としてあげたアーノルドの一節は，奇しくも『教養と無秩序』（*Culture and Anarchy,* 1867）の序文にある次のようなものである。

> ...Now, and for us, it is a time to **Hellenise**, and to praise knowing; for we have Hebraised too much, and have over-valued doing.[21]
>
> （今や，そして我々イギリス国民は一体となってギリシャ化し，知識をたたえる時である。というのも我々はあまりにもヘブライ化し，行動を尊重し過ぎてきたからである。）

まったく偶然ではあるが，実はこの一節が我々の話しと密接なつながりを持つ。この一節，とくに前半部分をよく見ていただきたい。"Now and for us, it is a time to Hellenise ..." というアーノルドの主張は，先のマリガンの提唱，すなわち "if you and I could only work together we might

do something for the island. Hellenise it."と奇妙に響きあうではないか。"us"と"you and I"，すなわち，「イギリス人」と「スティーヴンとマリガン＝アイルランド人」さらには「イギリス」と"the island"＝「アイルランド」を入れ替えれば，両者は"Hellenise"，まさに「ギリシャ化」という点でぴたりと一致するのだ。

ということは，もうお分かりのことと思われるが，ジョイスは，実はアーノルドの『教養と無秩序』の序文，とくに"Hellenise"の一節，「イギリスのギリシャ化」を「アイルランドのギリシャ化」にすり替えて，マリガンに語らせているのだ。言い換えれば，マリガンは，アーノルドのスポークスマン，旗振りの役をはたしているということなのである。ここにもまた，アーノルド――『教養と無秩序』は彼のオックスフォード大学詩学教授の最終講義を第一章として書かれた――が大きな影を落としているのだ。

以上，本章でとりあげた二つの場面を俯瞰すると，それらの背後に一貫してイギリス（大英帝国）とその知的権威＝牙城としてのオックスフォード大学が隠然として存在し，アーノルドが，言わばそのくびきとなってマーテロ塔の人々の上に覆いかぶさっている構図――イギリス対アイルランド＝宗主国対植民地の構図――が浮き彫りとなろう。

Ⅳ. 再びアーノルド――ギリシャ化の正体

先の第Ⅲ章で我々は，マリガンがアーノルドを後ろ盾にして，アイルランドの「ギリシャ化」を提唱するのを見たが，その前に我々は，本稿のまとめ，次稿の橋渡しとして，マリガンが手本としているアーノルドの「ギリシャ主義」なるものがいかなるものであるか，その正体を見極めておきたい。

マリガンの口からでた「ギリシャ化 "Hellenise"」という言葉は，アーノルドの思想とは切っても切れない関係にある。アーノルドの思想そのものと言ってよいかもしれない。その主張は，いま見た『教養と無秩序』――アーノルド思想の集大成と言われる――において，キーワードとして，序文を含め，何度か繰り返されている。『教養と無秩序』の結論ではそのまとめとして，次のように提示されている。

> ...But we are sure that the endeavour to reach, through culture, the firm intelligible law of things,――we are sure that the detaching ourselves from our stock notions and habits,――that a more free play of consciousness, an increased desire for sweetness and light, and all the bent which we call **Hellenising,** is the master-impulse even now of the life of our nation and of humanity,――somewhat obscurely perhaps for this actual moment, but decisively and certainly for the immediate future; and that those who work for this are the sovereign educators. (211-2)

抽象的で分かりにくいが「ギリシャ化 " Hellenising"」とは，まず第一に「教養によってたしかな明白な事理に到達しょうとする努力" the endeavour to reach, through culture, the firm intelligible law of things"」を重ねることである。第二には「我々自身をわれわれのおきまりの観念と習慣から解放すること"the detaching ourselves from our stock notions and habits"」である。そして第三には「意識のより自由な活動 "a more free play of consciousness"」や「優美と英知とに対する欲求の増大"an increased desire for sweetness and light"」を促すことである。この三つが我々イギリス国民（そして人類）を動かす「基本的な力 "master-impulse"」であり，この実現のために尽くすのが「最高の教育者 "the sovereign educators"」である，というのである。

先の序文での主張――「今や，そして我々は一体となって**ギリシャ化**し，知識をたたえる時である。というのも我々はあまりにもヘブライ化し，行動を尊重し過ぎてきたからである。"Now and for us, it is a time to **Hellenise**, and to praise knowing; for we have Hebraised too much, and have over-valued doing."」――と比べて，『教養と無秩序』の全体を見通せば，この意味はより明

らかとなろう。すなわち，「ギリシャ化」とは，ヘレニズムの教養主義と柔軟な知性主義を優先し，その対極にあるヘブライ主義の硬直した観念や慣習，偏った行動主義を是正・克服することであり，ヘブライ主義に偏ったイギリスの悪しき現状はヘレニズム精神の教育によって救済・活性化されるべき，ということだろう。

アーノルドは，周知のように，『教養と無秩序』の第三章において，同時代のヴィクトリア朝社会を「貴族階級"aristocratic class"」，「中産階級"middle class"」，「労働者階級" working class"」に分類し，それぞれに「野蛮人"Barbarians"」，「俗物"Philistines"」，「大衆"Populace"」というレッテルを貼った（98-105）。そして，まず「貴族階級」については，もはやかれらの文化や能力・天分は過去のものであり，今日の新しい社会情勢には役に立たない。「労働者階級」についても，将来的にはともかく，粗野・未熟で連帯意識や行動力も不足している。従って今最も頼りになり，大切なのは中間にある「我々の中で最も堅実な階級"the steadiest class among us"」(162)，すなわち「中産階級」である。しかし，このイギリスの中核ともいうべき「中産階級」は，勤勉・堅実であるが，「富" wealth"」に走り(51)，「機械主義 "worship of machinery "」(82)，「地方主義 "provinciality"」(12)，「自己満足"self-satisfaction"」に染まり(99)，かつあまりにも清教主義的で，つまりは悪しきヘブライ主義に偏り，柔軟で美的・知的な精神にかける，すなわち「俗物」であるという。しかし，将来のイギリスを担うのは，この「中産階級」をおいて他にない。我々はこの「中産階級」をともかくも正しく健全に育成して行かなくてはならない，というのである。

ではどのようにしてそれを達成するのか。アーノルドにおいては，それはまさに『教養と無秩序』の「序文」において提唱したあの「教養」を普及させるにしくはなかった。

「教養」について，アーノルドは力説する。

> ...The whole scope of the essay is to recommend culture as the great help out of our present difficulties; culture being a pursuit of our total perfection by means of getting to know, on all the matters which most concern us, the best which has been thought and said in the world; and through this knowledge turning a stream of fresh and free thought upon our stock notions and habits, which we now follow staunchly but mechanically, vainly imagining that there is a virtue in following them staunchly which makes up for the mischief of following them mechanically.（６）

「教養」とは，「総体的な完全の追求"a pursuit of our total perfection"」であり，「世界でこれまでに考えられ語られた最善のものを知ること"to know...the best which has been thought and said in the world"」，「おきまりの思想と習慣とに，新鮮な自由な思想の流れをそそぐこと "turning a stream of fresh and free thought upon our stock notions and habits"」をめざすものだ，というのである。

そしてこの過程のなかで生み出されるすべてのもの，すなわち，「人間性のいっそう調和のとれた発達"a fuller harmonious development of our humanity"」，「型にはまった観念に対する自由な考えかた"a free play of thought upon our routine notions"」，「意識の自発性 "spontaneity of consciousness"」，「甘美と光 "sweetness and light"」（162-3）が，結局「教養の効用 "use of culture"」(51) として，我々の身につくヘレニズムの精神＝ギリシャ主義ということであった。アーノルドにおいては，このヘレニズムの精神＝ギリシャ主義こそ，イギリスの「中産階級」が今最も必要とするものであったのである。

かくてアーノルドは，「教養」に育まれたヘレニズムの精神をかかげて，イギリス「中産階級 」の「俗物根性 "Philistinism"」（108），すなわち彼の言う悪しきヘブライ主義が生んだ硬直した精神を糾弾し，彼らの精神の救済・再生をめざした。これは，まさに批評家にして教育家たるアーノルドの生涯をかけた仕事であった。

しかしアーノルドの仕事はこれにとどまることはなかった。彼にはもう一つ大きな仕事があった。それは，ヴィクトリア朝時代後期において新勢力となってきた,「未発達で訓練れされていない"inchoate and untrained"」(93),「我々の遊び好きな巨人"our playful giant"」(81) すなわち，あの「労働者階級」にどう対応するか，という問題であった。

『教養と無秩序』執筆（1867-8）前後，イギリス国内は，参政権を求める労働者の大規模な示威運動が各地で頻発し，不穏な空気に包まれていた。参政権は，結局，1867年の第二次選挙法で実現し，示威運動は鎮静化したが，1866年7月に起きた，いわゆる「ハイド・パーク暴動」(Hyde Park riots) は，アーノルドに「無秩序」の恐怖を刻み込んだ。参政権を要求するデモ隊の一部が警官隊と衝突し，暴徒と化した群集がハイド・パークの柵を倒して園内になだれ込んだ事件である。

この時の拭い難い恐怖がきっかけとなり，急遽アーノルドは,「無秩序」を抑える手立てを考える必要に迫られ，これが『教養と無秩序』という形に結実したのであった。おもえば,『教養と無秩序』のもとになった，オックスフォード大学の最終講義の演題は「教養とその敵」("Culture and Its Enemies") であった。その意味で,「無秩序」は「教養」の「敵」であり，イギリス中産階級を蝕む悪しき「ヘブライ主義」,「俗物主義」と同様,「教養」が対決し，克服しなければならない相手であったと言えよう。

アーノルドの目には,「労働者階級」の最大の特性は，理性と抑制を欠き，自分の欲するままに「好きなようにする" to do as he likes"」(77) ことであった。「ハイド・パーク暴動」が，まさにそのいい例である。各人が自分の欲するままに「好きなようにする」と結果はどうなるか,「無秩序」に陥るだけである。「ハイド・パークの暴漢"the Hyde Park rioter"」(80) には「国家の観念 "idea of a State"」すなわち,「政府として，他人をも彼自身をもふくめた全員のより高い道理の名において，各人の自由活動を統制する，集団的な，共同的な性格を帯びた国民の観念"idea ...of the nation in its collective and corporate character controlling , as government, the free swing of this or that one of its members in the name of the higher reason of all of them, his own as well as that of others".」(81) が全くない。だから逆に言えば,「ハイド・パークの暴漢」のような人間＝労働者には,「無秩序」に走るのを防ぎ止めるために,「国家」の力が必要なのだ，とアーノルドは主張する。

アーノルドの主張は，要するに，労働者は「教養」と無縁であるがゆえに，人間として粗野で不完全である。その結果，彼らは好き勝手な振る舞いに走り，無秩序を生み出し社会を混乱させる。この無秩序・混乱を抑えるためには「国家の統制 "State-control"」(17) が必要である，ということだろう。

労働者の「無秩序」問題とその対策が，いつのまにか結局は労働者の「国家」統制論に向かってしまったような気がするが，アーノルドは，この地点からさらに話しを一般化する。すなわち,「労働者階級」を含むすべての「階級」が,「階級」の枠を超え,「権威の中心 "authoritative center"」(110) である「国家」をめざすことを提案し，次のように結論づける。

> But our *best self* we are united, impersonal, at harmony. We are in no peril from giving authority to this, because it is the true friend we all of us can have; and when anarchy is a danger to us, to this authority we may turn with sure trust. Well, and this is the very self which culture, or the study of perfection, seeks to develop in us... We want an authority, and we find nothing but jealous classes, checks, and adead-lock; culture suggests the idea of *the State*. We find no basis for a firm State-power in our ordinary selves; culture suggests one to us in our *best self*...(95-6)

我々は,「通常の自己"ordinary sef"」にとどまっていては，各人バラバラで「無秩序」で互いに危険を免れることはできない。「教養」によって育まれる「最善の自己"best self"」によって互いが

結ばれることにより，そこにはじめて「権威"authority"」のある「国家" the State"」が実現する，というのである。第三章における次の一節と合わせれば，「教養」，「最善の自己」，「国家」が――アーノルドにおいては――めでたくも手を結ぶ。

> ...our best self or right reason, to which we want to give authority, by making the action of the State, or nation in its collective character, **the expression of it.** (123)

"**the expression of it**"という一句に注意したい。"it"は "our best self" を受ける。すなわち，「我々の最善の自己」の「表現」が「国家」というのである。とすれば，我々はすべてがより良き「国家」のために少しでも「自己」を最善なものに高めなければならない。その何より有効な手立てが「教養」であり，そこで「教養」の「国家」としての「教育」が責務となるのである。まさに「視学官」としてのアーノルドが語らせた言葉であろうか。

「教養」を高める＝みがくこと，それはアーノルドにおいては，ギリシャ精神＝ギリシャ主義を身につけることであった。「知と美"sweetness and beauty"」をよりどころとして，自己「完成」をめざすギリシャ精神＝ギリシャ主義は「国家」のすべての人々がめざすべきものであり，これを歪めたり，阻止したりするものはアーノルドの断じて許すことができないことであった。

しかし現実には，先にも触れたように，イギリスの屋台骨とも言うべき，「中産階級」は，偏ったヘブライ主義――それは実は「中産階級」の多くをなすに至った，偏狭なピューリタン，アーノルドが「福音主義のハイエナ" the Evangelical hyaena"」[22] と嫌悪した，「非国教徒 "Nonconformist"」(167) のもたらす「俗物根性」――に染まっていた。「労働者階級」は自分の「好きなようにする」だけ，「貴族階級」はすでに過去の人間で，現実への対応力はない。時代は，「非国教徒」が下院の自由党員の過半数をにぎり(167)，「個人的な自由の主張"assertion of personal liberty"」（74）がまかりとおり，「権威の健全な中心" a sound center of authority "」（119）を欠いた，憂うべき「拡散の時代 " epochs of expansion"」(83) であり，「崩壊と変容の時代"an epoch of dissolution and transformation"」[23] であり，「無秩序」の危機に瀕した時代であった。

アーノルドの「教養」は，こうした危機状況の克服手段として登場してきたものであり，先にみた労働者たちの引き起こした「ハイド・パーク暴動」は，「教養」＝ギリシャ主義の徹底，浸透を切実なものとするに余りある決定的事件であった，と言っても過言ではないだろう。

このように考えてみると，アーノルドの唱える「教養」＝ギリシャ主義は，決して悠長な観念的なものではなく，『教養と無秩序』の副題――「政治・社会評論 "An Essay in Political and Social Criticism"」が示唆するように――きわめて時局的な性格，政治的な性格をもつものであったことが知られよう。「労働者階級」と「非国教徒」は徒党をくんで「国家」をゆるがす，「国家」の異端分子・危険分子であり，「教養」＝ギリシャ主義の「敵」として断罪されているのである。

そして，イギリスの「労働者階級」，「非国教徒」ならんで，アーノルドにとって「国家」をゆるがすもう一つの存在が，イギリスからの武力による独立を求めるアイルランドの「フィーニアン "Fenian"」であった（79）。フィーニアンの組織は，1858年に結成されたが，その武力闘争がアイルランド，イギリス各地で激化し，テロ事件が頻発するようになったのは1860年代のことである。ということは，イギリスにおける労働者たちの条件闘争や参政権を求める運動が激化した時期と重なり，『教養と無秩序』の執筆時期とも重なることになる。アーノルドには，これらの「ならず者 "rough"」（79）が引き起こす暴力は，「ハイド・パーク暴動」がその最たる例であったように，この上なくおぞましいものであり，嫌悪とそして，何よりも，社会の「秩序」を乱す脅威の対象に他ならなかった。労働者もフィーニアンもともに，「自暴自棄で危険な "desperate and dangerous"」（79）存在で，彼らの暴力行為こそ，アーノルドには平和な社会を「騒乱の巷 "a bear-garden"」(81) と化す，まさに「無秩序」の生々しい象徴でしかなかったのである。

アーノルドは，これらの「ならず者」には，もう，悠長なことは言わない。「国家の権威 "State-

authority"」(75) 」を持ち出すのである。『教養と無秩序』の「結論」は，「序文」でおっとりと「教養」の目的や効用を説いた悠長な姿は影を潜め，社会・国家の混乱・崩壊に面した時の，言わば，体制擁護者の断固たる姿が強く出てくるのだ。例えば「おおぜいの街頭行進"monster processions in the streets" 」や「公園への無理やりな侵入"forcible irruptions into the parks"」(203-4) など「国家」を乱す行為は，今度は，「貴族階級」と「中産階級」と手を組んで断固，「鎮圧 "repressing"」すべきと言い放ち(203)，ついには『教養と無秩序』で最も言いたかったこと，本音を口にするのだ。

> Thus, in our eyes, the very framework and exterior order of the State, whoever may administer the State, is sacred; and culture is the most resolute enemy of anarchy, because of the great hopes and designs for the State which culture teaches us to nourish ...(204)

「国の機構と外側の秩序」は神聖にして犯すべからざるものであり，「教養」は「無秩序の最も断固たる敵」として，その番人となる。そして，「教養」は神聖な「国家」への「希望と構想」を抱かせ，「教養を愛する者」こそは「無秩序の反対者」となる，というのだ。

> ...So that, for the sake of the preset, but far more for the sake of the future, the lovers of culture are unswervingly and with a good conscience the opposers of anarchy. (*Ibid.*)

『教養と無秩序』という評論が，きわめて時局的な性格を帯びたものであることは，すでに指摘した通りである。しかしここで，我々は，もう一度この評論の副題が"An Essay in Political and Social Criticism"とされていたことを思い起こしてみなければならない。アーノルドが自身がそれをどれほど明確に意識していたかどうかは別として，きわめて "political"，すなわち「政治的」な性格を帯びたものでもあったのである。

では，その「政治的」な性格とはどのようなものであったのか。この点について，本論のまとめとして少し考察を加えておきたい。

アーノルドは，「国家」の理想を「最善の自己の集合体"organ of our collective best self"」(97) と考えた。その「最高の自己」は，「教養」=「完全性の追求」=ギリシャ精神により達成されるべきものであった。「教養」とは，「優美と英知 "sweetness and light"」，言わば「美」と「知」をガイドとして自己完成に精進することであった (69)。しかし，現実として，これがアーノルドの言うように「現在のわれわれの危機を救う大いなる手立 "the great help out of our present difficulties"」(6)であったかどうかは，はなはだ疑問である。当のアーノルド自身がその効果のほどは一番よく心得ていたであろう。とすれば，彼の本当の狙いは――どれほど意識していたかは別として――何であったのか。

この問題には実はヴィクトリア朝時代の社会・政治状況が大きく関わっている。アーノルドが生きたヴィクトリア朝時代は，かつてない改革，自由化と規制緩和の時代であった。その大きな結果として，「選挙法改正」（Reform Bill）を背に「中産階級」が従来の貴族・地主層に替わって政治上の実権をにぎり（第一次），また「労働者階級」が新たな政治勢力として台頭してきた（第二次）。この変化は，支配層・体制側の人間には大きな不安と脅威を与えた。前者については，とくに「国教」(state church) である「イギリス国教会」(The Church of England) ――「国民生活の主流 "the main current of national life"」(14)―― からの離反者が急増した点が深刻な社会問題となった。そして後者については，その早急な教育・啓蒙が問題となった。どちらの問題も，体制側にとっては，国の根幹にかかわる大きな問題であった。

「中産階級」は，これから大英帝国を背負って立たなければならないのに，その多くが「国教」を離脱して「非国教徒」となり，「ハイエナ」のように生きている。「労働者階級」は「労働者階級」でまだその得体が知れない「きままな巨人」で何をするかわからない。「貴族階級」はもう頼りになら

ない「野蛮人」に堕している。大英帝国は，アーノルドに言わせれば，「権威の中心」をかいた，バラバラの「拡散の時代」，「混乱」と「無秩序」に晒されていた。

そこで我らのアーノルドが登場するのである。オックフォード大学出身，母校オックフォード大学の詩学教授にして，視学官。まさに絵に描いたような大英帝国の知的エリート。彼の掲げた「教養」＝ギリシャ精神，自己完成の教えは，まさに自由化と規制緩和でタガの緩んだ大英帝国建て直しの教育的文化装置であったのである。言うなれば，視学官＝教育家が国民に出した宿題であったのである。

アーノルドは，この宿題を課すことにより，国民を教育し（手なづけ），彼らを束ねて国家へと導く。ただこの宿題は生徒である国民を選別・峻別する宿題でもあった。関心のない，やらない生徒＝「貴族階級」ははじめから問題としない。やらなければならない，またそれなりにできることが望まれる生徒＝「中産階級」。やらない，困った生徒＝「中産階級」の逃げ出した「非国教徒」。できないし，無理な生徒＝「労働者階級」，というように選別した。その上で，やらない，困った生徒＝「中産階級」の逃げ出した「非国教徒」と，できないし，無理な生徒＝「労働者階級」を生徒の対象から力づくでも除外し，クラス＝「国家」の純化を図り，それを強化しようとしたのである。

アーノルドの「教養」＝ギリシャ主義は，このように国民が到達すべき目標であり，いわば昔日の力を失った「イギリス国教会」になりかわり，イギリス国民を教化し，精神的に，統一するための文化原理であった。他方，それと同時にイギリス国民を「ギリシャ主義」という枠にはめ，その枠にはまらないものは排除する文化原理でもあった。一口に言えば，まさに大英帝国スポークスマンによる国体純化・維持のための文化イデオロギーであり，文化装置であったということである。

――つづく――

Notes

(1) 本章は，拙論「『歴史の悪夢』――"the Ascendancy"のくびき――」，*Joycean Japan*, no.7,（日本ジェイムズ・ジョイス協会，1996）を一部修正し転載した。

(2) Joyce, *Ulysses,* ed. Hans Walter Gabler et al. (London:Bodley Head, 1986). 以下，本論ではこの版をテキストとし，引用に際しては挿話番号と行数を括弧の中に記入した。なお引用原典に付した日本語訳については，一部修正のうえ，丸谷才一他訳を借用した。なおまた，本論では，以下，英文，日本文を問わず引用の際のボールド体は筆者による強調。

(3) マリガンのアングロ・アイリッシュとしての出自については，Platt, L.H, "The Buckeen and the Dogsbody: Aspect of History and Culture in ‘Telemachus’", pp.77-86における考察に詳しい。

(4) Platt, p. 81.

(5) See, Cheng, Chapter 6, "imagining selves", *Joyce, Race, and Empire*, pp.151-69.

(6) Pierce, *James Joyce's Ireland*, p.138.

(7) Arnold, “Preface to *Essays in Criticism*”, p. 288.

(8) *Ibid*., p. 290.

(9) さしづめ，次のような主張はアーノルドのアイルランド分離・独立反対論の典型的なものであろう。「アイルランド自治法案」（Irish Home Rule Bill）が議会にのぼり，国論を賑わしていたころ，タイムズ新聞社にあてたものである。

> ...A separate Parliament for Ireland is a dangerous plunge into the unknown, and no necessary; but not necessary on condition only that we do really at last give Ireland a rational and equitable system of government; and Salisbury can talk of nothing but coercion. Let us refuse a separate Parliament for Ireland with all firmness; but with equal firmness let us insist on the condition which alone justifies our refusal. (*The Times,* May 22, 1886)

(10) Ellmann, *James Joyce*, p.58.

(11) *Ibid.*,p.395.
(12) バルト，『物語の構造分析』，93－4頁。
(13) Gifford, Ulysses *Annotated: Notes for James Joyce's Ulysses*, p .16.
(14) クリスティヴァ，『記号の解体学――セメイオチケ1』，61頁。
(15) Wilde, *The Picture of Dorian Gray*, p.3.
(16) Wilde, *Intentions*, p.30.
(17) Blakemore, *The Riverside Shakespeare*, p.1161.
(18) Platt, "The Voice of Esau: Culture and Nationalism", pp.739-40.
(19) Wilde, *Intentions, op.cit.*, p.30.
(20) *OED*, s.v. "Hellenise".
(21) Arnold, *Culture ad Anarchy*, ed. J. Dover Wilson (Cambridge University Press, 1932). 以下，本論ではこの版をテキストとし，引用に際しては頁数を括弧の中に記入した。なお引用原文（原語）に付した日本語訳については，一部修正のうえ，多田英次訳を借用した。
(22) Arnold, *Lectures and Essay in Criticism*, p.277.
(23) *Ibid.*,p.288.

Works Cited

Arnold, Matthew. “Preface to *Essays in Criticism*”, in *The Complete Prose Works of Matthew Arnold, vol* Ⅲ*, Lectures and Essays,* ed. R.H. Super (Ann Arbor : University of Michigan, 1962), 289-90.
_____.*Culture ad Anarchy*, ed. J. Dover Wilson (Cambridge UniversityPress,1932).
Blakemore,G, ed.*The Riverside Shakespeare* (Boston:Houghton Mifflin Company,1974).
Cheng, V.J. Chapter 6, "imagining selves" in *Joyce, Race, and Empire* (Cambridge University Press), 151-69.
Ellmann, Richard. *James Joyce*. Rev. ed (Oxford: Oxford University Press,1982).
Gifford, Don and Robert J. Seidman. Ulysses *Annotated*: *Notes for James Joyce*'s *Ulysses*, 2nd ed. (Berkley:University of California Press, 1988).
Joyce, James. *Ulysses,* ed. Hans Walter Gabler et al. (London:Bodley Head, 1986).
Platt, L.H. “The Buckeen and the Dogsbody: Aspect of History and Culture in ‘Telemachus'”, *James Joyce Quarterly*, 27 (Fall, 1989):77-86.
_____ . “The Voice of Esau: Cultute and Nationalism in ‘Scylla and Charybdis'”, *James Joyce Quarterly,* 29 (Summer, 1992):737-750.
Pierce, David. *James Joyce's Ireland* (New Haven: Yale University Press, 1992).
The Times, May 22, 1886.
Wilde, Oscar. *The Picture of Dorian Gray*, Rep.ed (Penguin Books:1985).
_____. *Intentions,* 7th. ed. (London : Methuen and Co.Ltd., 1913).
The Oxford English Dictionary, 2nd. ed.(Oxford:1989).
伊藤徳一郎，「『歴史の悪夢』――“the Ascendancy”のくびき――」，*Joycean Japan*, no.7, （日本ジェイムズ・ジョイス協会，1996）：35-44頁。
クリスティヴァ，ジュリア，『記号の解体学――セメイオチケ1』原田邦夫訳，（せりか書房，1983），61頁。
多田英次次訳，『教養と無秩序』（岩波文庫，1946）。
バルト，ロラン，『物語の構造分析』花輪光訳，（みすず書房：1979），93－4頁。
丸谷才一他訳『ユリシーズⅠ・Ⅱ』（集英社，2003）。